

2, 校区の概要

- ① 本校は沖縄本島のほぼ中央に位置し、那覇の北方約 40 kmの東海岸に面し、北部への東玄関口となっている。
- ② 面積は約 38 kmで、65%が軍用地に接収され農耕地のつぶれた割合は全農地の 46%を占めている。それが、町づくりや教育環境へ少なからず影響しているといえる。
- ③ 本校区は金武（1, 2区）、並里（3, 4区）の二つの行政区で構成し、町役場、農協、診療所、郵便局、銀行、町立中央公民館、町教育委員会、町立体育館、町立図書館、町立武道館、町立総合保健センター、琉球病院等の諸官公庁があり、町の行政、経済文化の中心地となっている。
- ④ 校区内は、金武観音寺、鍾乳洞、金武大川、金武児童公園、大川児童公園、当山公園、ウランダ森公園、モーシの森公園等の観光地と憩いの場に恵まれ教育環境としてはよい条件にあるといえよう。
- ⑤ 戦前は海あり、山あり、田、畑あり、後背地も広く農耕地に恵まれた裕福な純農村であった。
- ⑥ 沖縄移民の父、当山久三氏を生んだ町は、進取の気性を町民の合言葉にし、その名は広く知られている。
- ⑦ 町民はもともと純朴地味、堅実型で勤労精神に富み、戦前は海外からの送金が多く生活も豊かで沖縄で初めての鉄筋コンクリート校舎もでき昭和 57 年まで現存していた。
- ⑧ 戦後海外からの多くの引き上げ者を迎え、一時、農村復興の旗印のもとに荒地の開墾に熱を入れ、農村としての落ち着きを取り戻したが、昭和 36 年（1961 年）町内一の肥沃な土地がキャンプハンセンの基地に、接収され、農業への意欲が著しく阻害された。
- ⑨ 農家は農業収入だけでは、生計の維持が困難となり現金稼ぎのために離農の傾向が目立ち、兼業農業として祖先伝来の土地を守っているか、あるいは夫婦共稼ぎをする家庭が増えつつあるなど職業構成は、流動的で変動が多い。
- ⑩ 米軍基地の設置以来、基地に働く人々や関連する職業に従事する人々は沖縄の全地域は勿論、遠く鹿児島県あたりからも集まり、第 3 次産業を中心とする半都市が校区内の一角に形成された。ここは夜と昼の人口変動が大きく、また米軍の動向によって経済の変動も敏感のようである。

以上のように、本校区は地元民の居住する農村形態地域と商工業者の居住する都市形態地域の同居する二重構造の中で戦前からの精神的風土を土台にさらに新しい精神構造が生まれつつあり、自然的、文化的環境と相まって、ここに生をうけ、ここで育つ子供たちに有形、無形の強い影響を与えているものと考ええる。